梅林の詩碑

玉井洋子

眼下に家島群島をのぞむ小高い丘の斜面に無数の古墳が散在している揖保郡御津町の綾部山梅林に、詩人君本昌久の詩碑が建っている。

ひとめ二万本を誇る梅林マップには南山頂近くの正玄塚古墳のそばに、「顕彰碑」とのみしるされている。この碑は、昭和四十三年、土地改良付帯事業の一環として国有林を開墾するにあたり多大な貢献をされた当時の御津町長、八百亀治氏の顕彰碑として建立されたものである。

昭和五十五年二月二日、春まだあさい綾部山梅林で碑の除幕式が行われた。書家・上野賀山氏の揮毫によって大きな御影石に刻まれた君本昌久の詩「綾部山賛歌」に作曲家・中村茂隆氏の曲がつけられ、地元有志の奏でる琴の音にあわせ、神戸大学混声合唱団がたからかにうたいあげる。

ひろがる空から
ひろがる海から
この世の春が来て
天上の花　てん　てん　てん
ここここそ　ふるさと
ふりむけば揖保川
在りし日に去来するのは
かの人の心のひびきか
山をあやなし　馥郁と
梅におう

歌声に呼応するかのように、その時晴れ渡った青空からひらひら舞い降りてくるものがあった。まるで天からの応えのように粉雪が舞ってあたりを白く彩った。それは、雅やかな宴に華を添え、幾世霜をこの地に眠る先人たちの魂を呼び覚ます儀式のように思われた。天と地がひとつになった瞬間だった。

梅林観光マップの何処にも君本昌久の名がしるされていないが、碑に刻まれたことばも文字も、私たちがみんないなくなったのちにもこの世にあり続け、語り続けてくれることだろう。

梅におう季節春はもうそこまできている。

詩　・君本昌久
書　・上野賀山
写真・井上青龍

兵庫県現代詩協会 会報
［詩碑探訪シリーズ11.］より転載